

国連NGO横浜国際人権センター・うずしおランチ T-over人権教育研究所・人権こども塾 ニュース

当時、一緒に務めていた教員が、「みんなで語り合う人権学習」をどう思っていたか、そのつづきです。

2 進行役の立場としての私

語り合いは、とにかく発言から始まることであるので、黙ったままの重い空気を破って始めてくれる子の存在がないと前に進まない。最初の揺さぶり、投げかけに苦労した。

当然のこととして、こちらに熱い思いがないと生徒たちは心を開かない。また教師と生徒、生徒同士の信頼関係ができていないところに、真の話し合いはあり得ない。そのために日々、自分はこのだけの人間だということを、子どもたちに知ってもらえるよう努力をした。生活ノートでの対話、学級通信、休み時間などでの話などで、私自身の思いを伝えていた。そのこと抜きでは全体学習はできないと思っていた。そこには、一番最初の全体学習の司会での苦い経験があったから。

そう前置きしたうえで、Y先生は、当時の苦々しい思いを吐露してくれました。

5時間目の1クラスの話し合いが終わり、その後の6時間目の学年全体学習での司会だった。私の問いかけに、誰も応えない。

思いあまって指名した生徒が発したひとことが、「わかりません」。

しかもにやけながら。ムツとした気持ちを抑えて、次の生徒に指名。

「わかりません」

その後も数名の「わかりません」が続いた。最悪だった。

その後のことはあまり覚えていない。修正できずじまいで時間が過ぎた。

「なんやねん、まったく心など育てないじゃないか」と、子どもたちや全体学習を批判する気持ちでいっぱいになった出来事だった。

しかしながら、無理もない。病休明けの途中赴任。授業でしか会わない副担任。事務的に全体学習の司会をしている人間に、心など開けないのは当たり前だった。

この学習に取り組みはじめた頃の私たちは、怒濤のごとく突っ走っていました。知らないこと、分からないことがあまりにも多くなかで、何が正しくて何が間違いなのか、答えを必死になって求めていました。

そんななかでの実践でしたから、教員間は常に喧々譁々の議論の連続でした。関係がギスギスしたこともありましたし、逆に、すごく分かり合えたように感じたこともありました。

暗闇のなかで両手を振り回しながら、遠くに見えるかすかな光に向かい進んでいるような感覚でした。

また、「こんな私の話より、〇〇先生がここに来て話してくれた方がよっぽどたくさんの意見が出る。代わってくれないかなあ」と思っていた時期があった。

他のクラスの先生のやり方が気になって仕方がなかった頃もあった。

生徒たちも敏感に感じ取るのか、そんな私が前に立っても、おそろおそろの意見が多かったように思う。

「もう、このクラスは私がやっていくしかない」と、覚悟を決められるようになってから、自分自身もクラスも少しずつ前に進んでいくというか、歯車が回り始めたのではないかと思う。それにはもちろん、蔭でたくさんの先生方の問いかけや投げかけがあったらうし、私自身もたくさんの先生にかなりサポートしてもらったことは確かである。

本気になるということが、いかに難しく、けどいかにシンプルな答えであるか。

そんな本気を、子どもたちも感じ取っていたのかもしれない。

そしてそれに純粋に、応えてくれていたのかもしれない。

本気の人権学習は、——「すべてを変える」

うずしおランチ代表